

＜教員調査＞

若手教員の資質・能力のさらなる向上をめざして －「フレッシュせんせい教師力向上ガイドブック」の提示－

河野 由佳

若手教員は、自主的・自発的に自己研鑽に励むとともに、活気ある学校における温かい人間関係の中で、互いに切磋琢磨して資質・能力を高め合うことが大切である。そこで、本研究では、京都市立小・中学校の採用2・3年目教員及び教務主任を対象に、「若手教員の教師力向上」に関するアンケート調査を実施し、実態と意識を探った。この調査を基に、校外研修・自己研修・校内研修における工夫や改善を図るための基礎資料を作成するとともに、分析結果を踏まえ、若手教員の教師力向上のためのガイドブックを提示する。

※以下、採用2・3年目教員のことを「若手教員」と記すこととする。

1. 「若手教員の教師力向上」に関する調査

若手教員の研修や資質・能力向上をめざした取組に対する意識と実態を探るため、アンケートを実施し、教師力向上のための基礎資料を作成することにした。このことにより、研修ニーズを把握し、研修内容の工夫・改善を図ることができると考えたからである。また、若手教員の困りや悩みを把握することで、校内体制での教師力向上の取組の参考にすることができると考えた。研究の方法は以下のとおりである。

＜調査方法＞

質問紙法による実態及び意識調査（採用2・3年目教員用、教務主任用とも全19問）

＜調査時期＞

小学校：平成24年9月4日（火）～9月21日（金）

中学校：平成24年9月19日（水）～10月5日（金）

＜有効回答数＞

小：採用2・3年目教員284/288人、教務主任170/170人

中：採用2・3年目教員151/152人、教務主任73/73人

2. 「教師力向上」に必要なもの

◆教師力を高めるための情報収集の場

小・中学校とも、「総教センターなどでの研修」「校内研修」「先輩や同僚との話合い」を情報収集の場としたい（してほしい）と感じている若手教員・教務主任の割合が高かった。中学校においては、若手教員の約1/3が「支部研修」で情報収集をしたいと考えている。

◆高めていきたい（高めてほしい）教師力

小・中学校の若手教員は、「子ども理解」「専門知識」「実践的指導力」を高めていきたいと考えている割合が高かった。若手教員と教務主任の回答を比較すると、「使命感や誇り」「愛情や責任感」「総合的人間力」については、高めてほしいと回答した教務主任の割合が、高めたいと回答した若手教員の割合の、それぞれ約2倍となった。

3. 校外での研修

◆校外での研修の必要感

校外での研修を必要だと考えている割合は、若手教員の方が教務主任より高い。

◆校外での研修内容の活用と共有

校外での研修で学んだことの実践での活用について、「できている」「どちらかといえばできている」と回答した若手教員の割合は、小・中学校とも、8割を超える。

一方、学んだことを先輩教員や同僚に伝え、共有しているかについては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した若手教員の割合は、小学校で6割、中学校で5割を超える程度である。

◆校外での研修ニーズ

若手教員・教務主任ともに、「教科等の授業実践」や「学級経営」に関する研修ニーズが高い。次いで、小学校では「教科等の実習」が、中学校では「生徒指導」が高い。

4. 自己研修

◆自己研修のためのツール

小・中学校とも、「先輩教員や同僚からの提供資料や助言」を活用していると回答した若手教員、勧めていると回答した教務主任の割合が最も高い。また、若手教員は、教務主任が勧めるツールだけでなく、自分自身で様々なツールを活用し、研修（研究）している。「インターネット情報」については、7割近い若手教員が活用していると回答している。

◆研究会活動や学会の参加

若手教員の参加状況は、小学校が中学校の約2倍となっている。また、「参加していないが、してみたい」と回答している若手教員の割合は、小学校で約4割、中学校で約5割となっている。

5. 校内での研修

◆校内における教師力向上の場

若手教員の回答をみると、小・中学校とも、「授業者として行う研究授業」が役立つと回答した割合が最も高く、次いで「研究授業の参観」となっている。一方、教務主任の回答は、「授業者として行う研究授業」が最も高いが、「研究授業の参観」よりも、「研究授業前の検討会」あるいは「学年会や教科会」が役に立つと回答した割合の方が高い。

「若手・中堅教員が学び合う取組」については、1/3 を超える教務主任は役立つと回答しているのに対し、若手教員は1割を超える程度である。

「研究授業前の検討会」については、小・中学校の教務主任や小学校の若手教員の約半数が役立つと感じているのに対し、中学校の若手教員は1/4 程度と低い。また、若手教員・教務主任ともに、「ワークショップ形式」の方が、「講義形式」よりも役立つと感じている。

◆学級経営における困りや悩み

若手教員が抱える困りや悩みは、小学校が中学校の約 1.3 倍になっている。小・中学校ともに、「子ども同士の間関係づくり」「学習ルールや規律づくり」についての困りや悩みが多い。

◆先輩教員や同僚からの助言（アドバイス）の機会

小・中学校とも、校内での助言については、「先輩教員や同僚」から受ける機会が、「管理職」や「主幹・指導教諭や主任」よりも多く、それぞれの約 2 倍となっている。

◆受けたい（必要な）助言内容

若手教員の回答をみると、小学校では「教科等の授業実践」が最も多く、次いで「学級経営」「生徒指導」となっており、中学校では「生徒指導」が最も多く、次いで「教科等の授業実践」「学級経営」となっている。「家庭や地域との連携、保護者対応」については、若手教員が3割程度であるのに対し、小学校では6割、中学校では5割近い教務主任が、助言が必要だと感じている。

◆校内における組織的な取組とその効果

組織的な取組や助言を行っている割合は、小学校の方が中学校よりも高い。取組の内容については、「若手教員の授業研究に対する指導助言」が多く、次いで「先輩教員の授業参観・師範授業」となっている。

小・中学校とも、「効果がある」「どちらかといえば、効果がある」と感じている教務主任は9割を超える。しかし、「多忙で時間がない」「ニーズに応じたテーマや方法、場の設定が必要」「中堅教員の資質向上」といった課題もみえてきた。

6. 「若手教員の教師力向上」のための方策

(1) 教員調査からみえてきたもの

分析の結果を踏まえ、様々な研修の場において、どのような工夫や体制づくりが必要であるのか、改めて見直したい三つの視点を提案する。

- ① 校外での学びや情報を校内で共有する体制づくり
- ② 若手教員を主体とした、校内での学び合いの場の設定(組織的・計画的な取組)
※ただし、コーディネーターや指導助言者が必要
- ③ 中学校ブロックの小中合同研修会・支部研修会の活性化(小グループ研修会での学び合い)

また、若手教員が教師力向上を図る上で大切な六つのポイントを以下に示す。

<Off-JT：校外での研修において>

- ① 自分の得意分野・専門性を伸ばす
 - ② 校外での学びを実践で活用し、校内で共有する
- #### <SD：自己研修において>
- ③ 情報収集のネットワークを広げ、自己実現を図る
 - ④ 実践記録を基に、成果と課題を明確にする

<OJT：校内での研修において>

- ⑤ 組織の一員として、協働的に課題解決を進める
- ⑥ 実践の発信(報告・発表)を積極的に行う

(2) 「フレッシュせんせい教師力向上ガイドブック」の作成

本市では、全ての教職員が共有すべき「教職員像」として、「確かなビジョンと力量をもつ教職員」をめざすことが明示されている(「平成24年度学校教育の重点」)。そこで、若手教員の資質・能力の向上に関する具体例をガイドブックとして示すことで、効果的な人材育成の実施に資すると考えた。内容は、以下のとおりである。

目次

- <1> 教師としての心得編
- <2> 教員調査からみえてきたもの
- <3> 教師力アップ編
 - (1) 校内での研修
 - (2) 校外での研修
 - (3) 自己研鑽
- <4> プロとしての実践編
 - (1) 集団づくり・学級づくり
 - (2) 授業づくり
 - (3) 子どもとの信頼関係づくり
 - (4) 家庭・地域社会との関係づくり

若手教員の姿や思いをとらえたこの研究が、教員一人一人の教師力の向上を図り、「教員の自己実現」「教員を育てる学校体制づくり」の一助となることを願っている。